

## 坊門局の書風にみる父俊成の影響

### はじめに

坊門局は冷泉家の祖となる御子左家の藤原俊成（一一一四—一二〇四）の娘である。冷泉家時雨亭文庫には『兼輔中納言集』『源順集』『元輔集』『平兼盛集』『能宣集』『源重之集』<sup>1)</sup>の六集が坊門局筆として伝わっており、その筆跡は父俊成を思わせるものがある。管見の限りでは坊門局の筆蹟に関する先行研究は見られない。本稿では、坊門局の書風について、「父俊成の多大な影響のもと坊門局の筆蹟は成った」という仮説を立て、俊成と坊門局の筆蹟についてひらがな一五文字と漢字一字を比較分析し、考察を行う。続いて、「定家監督書写本」に関して、側近が本文を書写する際、定家の筆蹟に忠実に書写していたこ

## 阿部彩乃

とから、「坊門局は俊成の側近ともいべき存在であった」という可能性について指摘する。比較する資料としては、書写年代が俊成、坊門局ともに同じ時期である了佐切『古今和歌集』（以下『了佐切』）と、冷泉家時雨亭文庫蔵「三十六人集」の『兼輔中納言集』『源順集』『元輔集』『平兼盛集』『能宣集』『源重之集』をそれぞれ用いた。まずは「三十六人集」が俊成監督書写本であることを示し、それらが比較するに足る資料であるということを証明したあと、本格的な比較作業に入る。

### 一 比較資料の選択に関して

#### 一一一 「三十六人集」に関して

坊門局の真筆資料として明らかにしているのものに関戸家

伝来の『唯心房集』がある。唯心房集の本文は現在公開されていないが、巻頭・巻末を含めた四葉のみが公開されており、巻末部に定家の筆で次のような識語が記されている。

此集以作者自筆之本

八条院坊門局下官大姉所書写也

これにより、『唯心房集』は坊門局の真筆資料であることが分かる。

また、『唯心房集』の本文には

よのなかを つねなきものと  
つねならぬよのことはりをおもはすはいかてかは「なのち  
るにたへまし

という訂正があり、これについて、冷泉家時雨亭文庫『平安私家集 三』<sup>(2)</sup>の解題では、

坊門局が「つねならぬよのことはり」と書写した初・二句の部分、俊成が「よのなかをつねなきものと」と訂正しているのであるが、こうした事実はこの坊門局による『唯

心房集』の書写作業が、俊成の監督の下に行われたものであることを、如実に示しているといえよう。そして、このことはまた同時に、この『唯心房集』が少なくとも俊成の歿した元久元年（一二〇四）以前に書写されたことを意味するものである。

とあり、『唯心房集』が坊門局の父俊成の監督の下で書写された「俊成監督書写本」であることが分かっている。また、団家所蔵の『清正集』『興風集』が、『唯心房集』と同筆であると認められているが、同書の解題では、これについて

まず注目すべきは、『清正集』の内題が、  
きよまさ<sup>タ</sup>、  
となつて

なことである。この平仮名で「きよまさ」と記したのは、本文と同筆ゆえに坊門局の所為と認められるのであるが、清正の読み方を「きよタ、」と片仮名で訂正したのは、俊成その人とみて差支えなからう。つまり、この本もまた、前述した『唯心房集』と同様に、俊成監督下に書写されたものである。

とあり、これら二集もまた、俊成監督書写本であるということが分かつている。さらに、『興風集』に関しては、同書の解題において

次に注意をしたいのは、『興風集』の内題に、

藤原興風集非卅六人云々

とあり、坊門局が「藤原興風集」を記した下に「非卅六人云々」と定家が筆を加えていることである。（中略）定家が興風を三十六人の内ではないと言っているのは、彼の勘違いとするほかないが、それはともかく、この『興風集』において、このような物言いを定家がしているということ自体、この『清正集』『興風集』が取りも直さず三十六人集の一環として書写されたことを物語っている。

とあり、これら二集が「三十六人集」の書写活動の一環として書写された家集であることが指摘されている。

これら二集と同筆で、同じく「三十六人集」の書写活動の一環で書かれたとされるものが、冷泉家時雨亭文庫の『兼輔中納

言集』『源順集』『元輔集』『平兼盛集』『能宣集』『源重之集』の六集である。この六集について、

この六集はいずれも『清正集』『興風集』と同様に、縦長四半形の冊子本に坊門局が書写しており、各巻ともそれぞれ定家の加筆がみられるいわゆる定家手沢本である。この内、『元輔集』の巻末には、

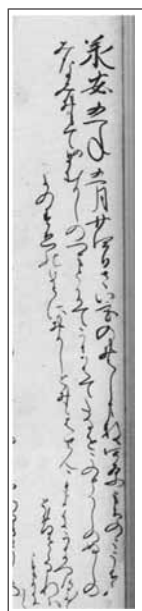
承安五年五月廿四日さい宮のおはします四条まちのこ

うち□

みなみおもてのひむかしのつまにてかきはてたるを

……

という奥書もあって(図①)、書写年次も明白に知られる。この承安五年(一一七五)という年には定家は未だ十四歳の少年でしかないが、その定家より少なくとも二十歳以上は年長かと推定されている坊門局は、おそらくこの時三十代の後半。俊成の命を受けて歌集を書写するには、十分な年齢である。このように、承安五年時点での二人―定家と坊門局―の年齢関係からみても、この三十六人集は、俊成監督の下で書写され、のちに定家の手に渡ったものと推定すべきであろう。



図①

とあり、これら六集も「俊成監督書写本」であり、また、書写年代は承安五年（一一七五）前後であるということが明らかになっている。

# 一一二 『了佐切』に関して

「三十六人集」が坊門局の真筆であり、俊成監督書写本であること、またその書写年代が同時期であることが確認できたが、この章では、『了佐切』もまた、承安五年（一一七五）前後に俊成が書写したものであるということを確認する。

『了佐切』に関しては、小松茂美氏の『古筆学大成 三』の解題に詳しい。これによると、

この「了佐切」は、所伝のごとく、藤原俊成（一一一四～一二〇四）の自筆として認めることは、今日の古筆学の研究分野においては、すでに定説である。

とあり、『了佐切』が俊成の真筆資料として足るものであることが指摘されている。また、『了佐切』の書写年代に関しては、同書の解題において、

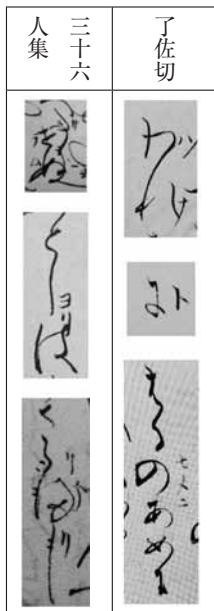
今も、俊成の真筆は一群のものが残っている。が、そのたしかな書写年代をたぐるのできるものは、まず、「広田社歌合」（前田育徳会蔵）である。これは承安二年（一一七六）十二月十七日の自筆奥書を伴っている。時に俊成は五十九歳。（中略）ついで、「日野切本千載集」である。（中略）この『千載集』が奏覧に供された文治四年は、俊成の七十五歳。とすると、「日野切本千載集」は、その後、俊成が家伝の一本として自筆で書写したもの。同じ年に書いたものとすれば、当然ながら七十五歳の執筆である。かように、前者とこの後者を見較べると、すでに俊成特有の筆癖が生じて、一つの型を形成している。これらと、この「了佐切」を見較べると、その偏癖の誇張は、それほど著しいものではない。つまり、これら二本に較べると、この「了佐切」は、それらより早い書写を思わせるものがある。つまり、「広田社歌合」よりも先行するのである。また、「御

家切」との比較によれば、その書写年代は後で、この「了佐切」は俊成の五十代半ば前後のころの執筆とみなければならぬ。

とあり、『了佐切』が俊成の五十代半ばの筆であるとする、約一一七〇年前後に書写されたものであることが指摘できる。

### 一三 「三十六人集」と俊成

「三十六人集」は、俊成が本文を訂正した書入れが見られることから、「俊成監督書写本」であることがわかる。『了佐切』と「三十六人集」に施された本文の訂正を見て、俊成が訂正を付したということを指摘する（図②）。『了佐切』に用いた資料は全て小松茂美『古筆学大成』第三巻、「三十六人集」の資料は全て冷泉家時雨亭文庫『平安私家集 三』を用いた。



図②

『了佐切』は上から図版9の二行目、図版9の三行目、図版15の七行目。「われ」の右隣に片仮名で「ハナ」、「に」の右隣に「ト」、「はるのあめに」の「のあ」の右隣に「サメニ」を振り、「はるサメニ」とも読ませている。

「三十六人集」は上から『能宣集』19オ、『源順集』39ウ、『源重之集』20オ。「たにせぬ」の隣に「サルラム」、「としは」の隣に「ヨリ」、「らまし」の隣に「リケリ」と加筆訂正がなされている。この加筆訂正をみると、双方とも縦長のカタカナが振られており、『了佐切』と「三十六人集」は、ともに俊成が加筆修正を行っていることが指摘できる。このことから、「三十六人集」は俊成監督書写本であるといえる。

これまで、冷泉家時雨亭文庫「三十六人集」の六集と、『了佐切』の書写年代に関して述べてきたが、「三十六人集」が一一七五年前後、『了佐切』が一一七〇年前後に書写され、双方とも坊門局・俊成の真筆資料として足ることが明らかであり、比較する資料として適切であることが指摘できる。

## 二 文字の比較

ここからは坊門局と俊成の筆蹟を比較し、その類似性について考察する。以下、図の甲が了佐切を表し、乙が冷泉家時雨亭文庫の「三十六人集」を表している。また、資料は、了佐切は全て、小松茂美『古筆学大成三』第三卷（一九八九年・講談社）、「三十六人集」は冷泉家時雨亭文庫『平安私家集三』（一九九五年・朝日新聞社）を用いた。

### 二―一 一文字の比較

ここでは、「る」と「わ」と「ま」の、一文字のかなの比較作業を行った。

まずは「る」の比較を行う。

乙①	甲①

甲①は上から『古筆学大成』七ページ四行目、八ページ四

行目、十ページ三行目、十ページ七行目、十一ページ七行目、十一ページ九行目から、乙①は『能宣集』1オ六行目、『能宣集』1オ八行目、『能宣集』3ウ三行目、『能宣集』5オ十四行目、『能宣集』7オ八行目、『能宣集』7オ十一行目から抜粋した。字母は「留」。いずれも現代の「る」のくびれがほぼ見られず、緩やかな弧を描いている。甲、乙ともに「る」の終筆の空間はつぶれているが、筆を戻しているため、書き終わりがやや膨らんでいる。全体的な筆の太さの違いはあるが、形として非常に似た筆蹟であることがうかがえる。

続いて「わ」の比較を行う。

乙②	甲②

甲②は上から、『古筆学大成』八ページ二行目、九ページ三行目、十ページ五行目、十二ページ二行目、十二ページ三行目、

十三ページ四行目から、乙②は上から、『元輔集』6ウ七行目、『元輔集』7オ六行目、『元輔集』11オ七行目、『元輔集』11オ十一行目、『元輔集』12ウ九行目、『元輔集』13オ六行目からそれぞれ抜粋した。字母は「和」。甲乙ともに二画目は一画目の縦棒より二ミリほど左にはみ出てから右に向かって大胆に弧を描いている。二画目の最後のはらいの部分について、甲②の二三、四、五枚目は、弧を描いた後、内側に反つてからはらわれているが、一、六枚目は反らずに最後まで弧を描くようにはらわれている。また、乙②を見ると三、五枚目は弧を描いたあと内側に反つてはらわれているが、一、二、四、六枚目は最後まで弧を描いてはらわれている。こうしてみると、双方の二画目の書き始めや、全体のバランス、また、最後のはらい方もそれぞれに二通りの違いがあり、こちらも筆蹟が似通ったものであるといえる。

続いて「ま」の比較を行う。

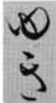




乙③	甲③

甲③は上から、『古筆学大成』三ページ四行目、七ページ一行目、八ページ六行目、十三ページ一行目、十五ページ三行目、十七ページ八行目、乙③は上から、『能宣集』1オ九行目、『能宣集』3ウ四行目、『能宣集』4ウ八行目、『能宣集』5オ八行目、『能宣集』5オ九行目、『能宣集』6オ六行目からそれぞれ抜粋した。字母は「末」。全体的なフォルムとしては双方とも細字で縦に長く書かれている。どちらも、「ま」の三画目が左になっている点が共通している。また、甲③の四、六枚目は下に文字が続いており、終筆が止まらず下に続いている。乙③で文字が下に続く三、六枚目を見ると、甲③と同様に終筆が止まらずに多に続いていることがわかる。「ま」ひとつのフォルムやバランスだけではなく、文字の接続の仕方でも、甲・乙の特徴が一致している。

## 二二 二文字の比較

次に、二文字のかなの比較を行う。ここでは「ゆき」「みや」「らん」の比較作業を行った。

まずは「ゆき」の比較を行う。

甲④	乙④
	
	
	
	
	

甲④は上から、『古筆学大成』十一ページ三行目、十一ページ九行目、十二ページ三行目、十二ページ四行目、三十ページ三行目から、乙④は上から、『能宣集』2オ一行目、『能宣集』2オ五行目、『能宣集』3ウ四行目、『能宣集』4ウ八行目、『能宣集』7オ九行目からそれぞれ抜粋した。字母は「由」「幾」。

甲④の二、五枚目は一画目がかなり上の方から始まっており、一、三、四枚目は、「ゆ」の真ん中の盛り上がりよりも下か、ほぼ同位置ではじまっている。乙④をみると、一、三、五枚目の一画目はかなり上の方からはじまっており、二、四枚目は真ん中の盛り上がりよりも下か、ほぼ同位置ではじまっている。また、弧を描き始める際、甲④の一、三、四枚目は一度筆を置き、二画目として書き始めている。この特徴は、乙④の二、四枚目にも同様に見られる。「ゆ」から「き」への連綿は、甲④一枚目を除き、甲乙両方とも区切れていて、連綿になっていない。「き」の一画目はほぼ点。甲④の一、二、三枚目は、わずかだが二画目

に続いている跡がうかがえる。乙④の一、三枚目も、一画目から二画目がつながっているのがわかる。また、双方とも、三角目から四画目がつながっておらず、離れた位置で四画目が打たれていることが分かる。

次に「みや」の比較を行う。

甲⑤	乙⑤
	
	
	
	
	

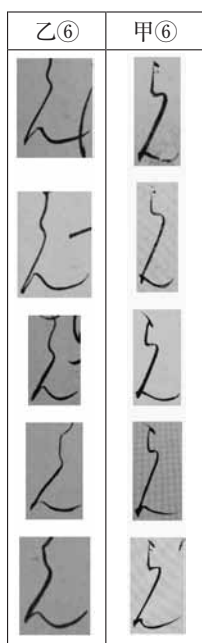
甲⑤は上から、『古筆学大成』八ページ二行目、十一ページ六行目、十七ページ六行目、十八ページ三行目、二十一ページ四行目から、乙⑤は上から、『能宣集』11オ九行目、『能宣集』22ウ四行目、『能宣集』28ウ十行目、『能宣集』34オ八行目、『能宣集』34オ十三行目からそれぞれ抜粋した。字母は「美」「也」。

双方とも「み」の一画目のはじめが短い。そこから大胆に斜め左下に下がっていく。また、「み」の一画目の円になっているところでは甲乙を見較べると甲⑤の方が鋭角的に円を描いているが、どちらも入りが太字で、折り返すと線が細くなっている



のがわかる。「み」の一画目から二画目の接続は、甲乙ともに一筆で書かれている。また、「み」から「や」の接続については、甲⑤の二、三枚目では連綿になっていないが、一、四、五枚目では、連綿となっているか、連綿となっていないとも、「み」と「や」のつながりが感じられるほど「み」の二画目が「や」の一画目に近い位置で終筆している。乙⑤を見ると、五枚すべてで「み」と「や」が接続されており、甲⑤乙⑤ともに同様の特徴を持つことが分かる

次に、「らん」の比較を行う。



甲⑥は上から、『古筆学大成』五ページ二行目、十九ページ四行目、十三ページ五行目、十七ページ一行目、二十二ページ四行目から、乙⑥は上から『能宣集』4才二行目、『能宣集』5ウ三行目、『能宣集』7才十五行目、『能宣集』8ウ十行目、『能宣集』10才九行目からそれぞれ抜粋した。字母は「良」と「无」。

まず一文字ずつ見ると、「ら」に関しては、甲⑥は一画目の点が明確に書かれているが、乙⑥は非常に簡素に書かれており、二画目と同化しているのがわかる。しかしこれは筆跡の違いというよりも、坊門局が俊成の筆跡をそのまま自分のものにしていうため、自身で「簡素化」しているということになり、ある意味「父俊成の多大な影響のもと坊門局の筆蹟は成った」という仮説の裏付けにもなり得る。また、「ら」から「ん」にかけての接続を見ると、「ら」の最後のはらいからそのまま大胆に左下に伸び、「ん」の一画目となっている。そのまま少しだけ上に筆を戻したあと、右に向かって大きくはらわれている。このはらい方は非常に特徴的であるが、甲乙双方に同じ特徴が見られる。

このように二文字のかなを比較すると、一つ一つの文字だけでなく、その接続などもまた俊成のものと類似していることが分かる。また、「らん」等を見ると、坊門局が「ら」を簡素化していることから、ただ真似ているのではなく、「父俊成の多大な影響のもと坊門局の筆蹟は成った」という仮説を裏付ける可能性を指摘できる。

## 二二三 三文字の比較

ここでは、「もみち」「おもひ」「さくら」の、三文字のかなの比較作業を行った。

まず、「もみち」の比較を行う。

乙⑦	甲⑦

甲⑦は上から、『古筆学大成』二十ページ一行目、二十四ページ三行目、二十七ページ十行目、二十九ページ一行目、二十九ページ八行目から、乙⑦は上から、『能宣集』1ウ九行目、『能宣集』4ウ一行目、『能宣集』4ウ三行目、『能宣集』8ウ七行目、『能宣集』22ウ十四行目からそれぞれ抜粋した。字母は「毛」「美」「知」である。まず一文字ずつ見ると、甲乙ともに「も」の一画目のはらひは小さく跳ね上がり、釣り針のようになっていいる。二、三画目は一筆で書かれている。乙⑦の四枚目以外は「み」とは繋がらず、単独で存在している。「ち」は双方とも二画目の、弧を描く部分が下の方にあり、縦棒の部分が長くなっている。また、「み」と「ち」の連綿においては「み」の二画

目から「ち」の一画目まで一気に接続されている点で甲乙ともに特徴が一致している。また、全体の位置関係を見ると、「ち」の位置は「み」の右半分ほどのところに書かれている点が共通している。











次に、「おもひ」の比較を行う。

乙⑧	甲⑧

甲⑧は上から『古筆学大成』三ページ一行目、八ページ十一行目、十六ページ六行目、二十三ページ九行目、二十九ページ五行目から、乙⑧は『能宣集』7ウ三行目、『能宣集』15ウ十五行目、『能宣集』17ウ四行目、『能宣集』17ウ十三行目、『能宣集』18才十三行目からそれぞれ抜粋した。字母は「於」「母」「日」まず一文字ごとに見ると、「お」では一画目の横棒が下になつていいる様子が双方に見られる。二画目の、円を描く部分は、甲⑧では短く右に反っており、五枚すべてで空間がつぶれているが、乙⑧は矢じりのように三角形に書かれており、空間

がつぶれず見えている。その後のはい方は、甲乙ともに扁平であり、三画目に向けて上方向にはらわれている。「お」から「も」への連綿については、甲⑧の一、二、三、五枚目、乙⑧の一、四枚目のように、連綿になっていないものと、甲⑧の四枚目、乙⑧の五枚目のように、「お」の三画目からもの一画目まで一筆で書かれているものの二通りがある。「も」から「ひ」への接続では、甲⑧の三、四、五枚目、乙⑧の五枚すべてのように「も」の二、三画目と「ひ」が一筆で書かれている。甲⑧の一、二枚目も、線は切れているが、「も」から「ひ」へのつながりを感じさせる。全体のバランスをみても、「お」「も」に較べて「ひ」が小さく書かれており、特徴が共通している。

次に、「さくら」の比較を行う。

乙⑨	甲⑨
	
	
	
	
	

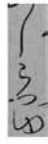






甲⑨は上から、『古筆学大成』十六ページ七行目、十七ページ一行目、十七ページ四行目、十七ページ八行目、三十八ページ十四行目から、乙⑨は上から『能宣集』9ウ九行目、『能宣集』

9ウ十行目、『能宣集』11オ十行目、『能宣集』12ウ三行目、『能宣集』12ウ六行目からそれぞれ抜粋した。字母は「左」「久」「良」。「さ」では、甲⑨の五枚すべて、乙⑨の一、二、五枚目で一画目と二画目が一筆で書かれており、そのうち甲⑨の四枚目以外では一画目と二画目の接続の部分に空間ができています。また乙⑨の三、五枚目の一画目と二画目をみると、一筆では書かれていないものの、二画目のはじまりが一画目に向かってしなっており、つながりを感じる事ができる。甲⑨乙⑨ともに三画目への接続はない。「く」では、甲⑨乙⑨ともに、入りから大胆に左側にしなり、そのまま勢いよく右に折れ曲がって、最後の筆を、「ら」の接続のために左へはらっている。連綿に関しては、「さ」と「く」は乙⑨の二枚目以外は連綿になっていないが、甲⑨の四、五枚目を見ると、「さ」から「く」へのつながりが感じられ、共通した特徴が見られる。

## 二―四 四文字の比較

続いて、「しらつゆ」「かなしき」の四文字のかなの比較作業を行った。









まずは「しらつゆ」の比較を行う。

乙⑩	甲⑩
	
	
	
	

甲⑩は上から、『古筆学大成』二十七ページ四行目、四十ページ十五行目、四十一ページ九行目、四十二行目三行目から、乙⑩は『元輔集』17オ十三行目、『源順集』26オ十一行目、『能宣集』15ウ八行目、『能宣集』15ウ十六行目からそれぞれ抜粋した。字母は「之」「良」「川」「由」「し」「ら」「ゆ」については先述したため省略する。「つ」を見ると、両者ともあまり幅をとらず、扁平な筆遣いがなされている点で共通している。全体の接続を見ると、「し」は甲乙ともに接続がない。「ら」から「つ」にかけては、乙⑩においては全てが「つ」まで一筆で書かれているが、甲⑩では、四枚目に「ら」と「つ」のつながりを感じることができるのみである。しかし、「つ」と「ゆ」の接続に関しては、甲乙のすべてで連綿になっている。また、全体のバランスを見ると、「し」が全体の三分の一ほどの大きさを占めており、その次に「ら」、そして「し」一字と同じか少し小さい程度の長さで「つゆ」が書かれている。全体のバランスが妨

門局と俊成で非常に類似していることが分かる。

続いて、「かなしき」の比較を行う。

乙⑪	甲⑪
	
	
	
	








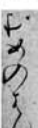


甲⑪は上から、『古筆学大成』二十三ページ九行目、二十四ページ二行目、二十四ページ三行目、四十三ページ四行目から、乙⑪は上から、『源重之集』2ウ八行目、『元輔集』24ウ十行目、『平兼盛集』5オ四行目、『平兼盛集』5オ十行目からそれぞれ抜粋した。字母は「可」「奈」「之」「幾」。まず一文字ずつ見ると、「か」は甲⑪では、全てに一画目の点がふられているが、乙⑪には一、三枚目にのみふられており、二、四枚目のように一画目の点を簡素化しているものがある。甲⑪より乙⑪の方がおおきりになっている印象を受ける。「な」では、字母は同じであるが、甲⑪の「な」が字母に近い形となっているのに対して、乙⑪の「な」では、一枚目以外ではより簡素化した形となっている。「し」では、甲乙ともに、前述した「しらつゆ」の「し」と同様に、

緩やかにくの字を描いて長く伸びており、共通した特徴を持っている。「き」は先述したため省略する。文字と文字の連綿を見ると、「か」から「な」は甲乙のすべてで連綿となっている。「な」から「し」では、甲⑪では、三枚目のみ一筆で書かれている。それに対し乙⑪では、すべてで「な」から「し」が一筆で書かれている。「し」から「き」は甲乙ともに連綿になっていない。

このように四文字の仮名の連綿・バランスが類似しているということは、三文字の比較よりさらに坊門局と俊成の筆跡、書風の類似性を如実に表していると指摘できる。

## 二一五 五文字の比較

続いて、「むめのはな」の五文字のかなの比較作業を行う。

乙⑫	甲⑫
	
	
	
	
	

甲⑫は上から、『古筆学大成』三ページ二行目、十四ページ二行目、十四ページ五行目、十四ページ七行目、甲⑪は上から、『能宣集』1オ七行目、『能宣集』7ウ九行目、『能宣集』9ウ

四行目、『能宣集』12オ九行目からそれぞれ抜粋した。字母は「武」「女」「乃」「者」「那」。まず、一文字ずつ見ると、「む」は一画目と二画目がほぼ一筆で書かれ、二画目は甲乙とも最後は小さく上にはらっている。最後の点は二画目の始筆とほぼ同じ高さから入り、そのまま小さく左にはらっている。「め」の一画目は甲⑫の一、二、三枚目、乙⑫の一、二枚目は止まっており、二画目と交わって「×」の形になっている。甲⑫の四枚目、乙⑫の三、四枚目は二画目に繋がっている。弧は非常に小さく描かれており、最後も大きくはらわれることはない。「の」は大きく書かれている。入りから大きく左下に伸び、そのまま真上に筆を走らせ、角張った形で右に筆を走らせている。最後の膨らみも大きい。「は」は一画目と二画目がほぼ一筆で書かれており、最後は甲乙とも似た角度で曲がり、そのまま「な」に繋がっている。「な」は「は」から繋がっている一筆で書き切られている。大きさは「む」「の」と同程度である。甲⑫の三枚目の「の」のみ、「乃」で表されているが、甲乙ともに一文字ごとの筆蹟が共通した特徴を持つことは明らかである。次に全体的な大きさや位置関係を見る。「む」「の」「な」が大きく、「め」「は」が小さい。「大小大小大」の順に並んでいる。またその中でも「の」が最も大きく、全ての「の」が最も左側にはみ出し

ている。このバランスの特徴が甲乙ともにすべて共通している。

五文字の単語のバランスが共通していることから、坊門局が俊成の書風を自分のものとして受け継いでいると指摘することができる。

## 二一六 漢字一字の比較

最後に、「月」、「人」の、漢字一字の比較作業を行った。

まずは「月」の比較を行う。

乙 <sup>13</sup>	甲 <sup>13</sup>

甲<sup>13</sup>は上から、『古筆学大成』四ページ二行目、九ページ六行目、十一ページ七行目、十五ページ四行目、十五ページ六行目、二十二ページ八行目、二十三ページ六行目から、乙<sup>13</sup>は上から、『元輔集』2ウ一行目、『元輔集』2ウ十一行目、『元輔集』6ウ四行目、『元輔集』8ウ十行目、『元輔集』オ十一行目、『元輔集』10ウ三行目からそれぞれ抜粋。甲乙ともに、一、二画目のバランスや二画目のはね、三四画目のくずし方など、共通した特徴を確認

することができる。

次に「人」の比較を行う。

乙 <sup>14</sup>	甲 <sup>14</sup>

甲<sup>14</sup>は上から、『古筆学大成』三ページ一行目、八ページ三行目、八ページ十一行目、九ページ二行目、十ページ五行目、十一ページ四行目、十三ページ五行目から、乙<sup>14</sup>は上から、『元輔集』8ウ七行目、『元輔集』18ウ一行目、『元輔集』20ウ一行目、『元輔集』30ウ三行目、『元輔集』38オ一行目、『元輔集』42ウ一行目、『元輔集』43ウ七行目からそれぞれ抜粋した。この漢字は、『了佐切』でも『元輔集』でも、他の文字と比べ、大きく書かれていた。また、縦横の比率がほぼ同じである。一画目、二画目とも大胆な筆遣いで書かれており、二画目は最後に左に向かって止められているものもあるが、甲<sup>14</sup>では三、六、七枚目が、乙<sup>14</sup>では六、七枚目が二画目は左にはねていない。二つの特徴が甲乙共通してみられる。

このように、ひらがなだけでなく、漢字においても、坊門局は俊成の影響を受けていると指摘できる。

### 三 監督書写本と書風に關して

ここまで、「父俊成の多大な影響のもと坊門局の筆蹟は成った」という考察を行ってきた。ここで、定家監督書写本を例にあげ、監督者と側近の書写者の書風に關して確認する。冷泉家時雨亭文庫『平安私家集 四』（一九九六・朝日新聞社）の解題<sup>③</sup>では、『兼澄集』に關して、

外題は表紙中央に打ち付け書きで「兼澄集」と定家風に記すが、力強さにやや欠けるところがあり、定家の真筆とするには躊躇される。おそらく定家の側近の手になるものであろう。それに対して、扉裏中央部に「かねずみが集」と仮名書きにされた内題の方は、確かに定家の筆と認められる。本文は一オのみが定家の手になるもので、以下はすべて側近の筆。

とある。また、『仲文集』の本文に關しては、同書の解題において、

全体の筆跡は定家のそれを思わせる部分も多いが、真跡ではあるまい。ただし、一〇オ3行目の「おやハ」「あとを」を擦り消して書く、一六オ1行目の「大入道殿」の「殿」、二〇オ2行目の「君かへし」などの加筆訂正や、二〇ウ2行目の「なと」の見せ消ち訂正などは、定家の所為と見られる。また四オ最終行の詞書「たえてのころ承香殿の但馬」も定家自身の補筆と見てよいのではないか。該本が定家が監督して周辺の人に書写させ、みずから校訂の筆を入れたものであるということは疑うべくもないのである。

とあり、定家監督書写本において、定家側近の書写者は、本文を定家の書風に近づけて書写していることが先行研究にて指摘されている。つまり、これまで検証したように、坊門局の書風もまた、俊成の書風と類似していることから、俊成監督書写本である「三十六人集」を俊成の書風のまま書写した坊門局は、俊成の側近ともいふべき立場にあったのではないかと指摘できる。



## おわりに

かな一字、二字や漢字一字では、文字そのものの筆蹟について坊門局が俊成の影響を受けていることが指摘できた。また、ひらがな三文字以上の比較では、文字と文字の接続や間隔、バランス等、筆蹟そのものの以外の書風が俊成のものと類似していることが考察できた。また、坊門局は自ら文字を簡素化しているなど、俊成の筆蹟と完全に同一ではないところがあることから、坊門局は「三十六人集」において俊成の筆蹟を真似ようとしたのではなく、「三十六人集」を書写した時点ですでに俊成の書風がそのまま坊門局自身の書風になっていたのではないかと考察でき、「父俊成の多大な影響のもと坊門局の筆蹟は成った」という仮説を裏付ける可能性を指摘できた。また、定家監督書写本の側近の筆が定家の書風に近い形で書かれていることから、俊成監督書写本において俊成と同じ書風で書写していた坊門局もまた、俊成の側近ともいべき立場にあったのではないかと考察した。

## 参考文献

小松茂美『古筆学大成』第三卷・講談社・一九八九年

冷泉家時雨亭文庫『平安私家集 三』朝日新聞社・一九九五年  
冷泉家時雨亭文庫『平安私家集 四』朝日新聞社・一九九六年

## 注

- (1) これら六集の書誌情報は『平安私家集 三』（冷泉家時雨亭文庫・朝日新聞社・一九九五）に詳しい。
- (2) 解題は片桐洋一氏、田中登氏による。
- (3) 解題は片桐洋一氏・田中登氏による。

（あべ あやの／本学大学院生）